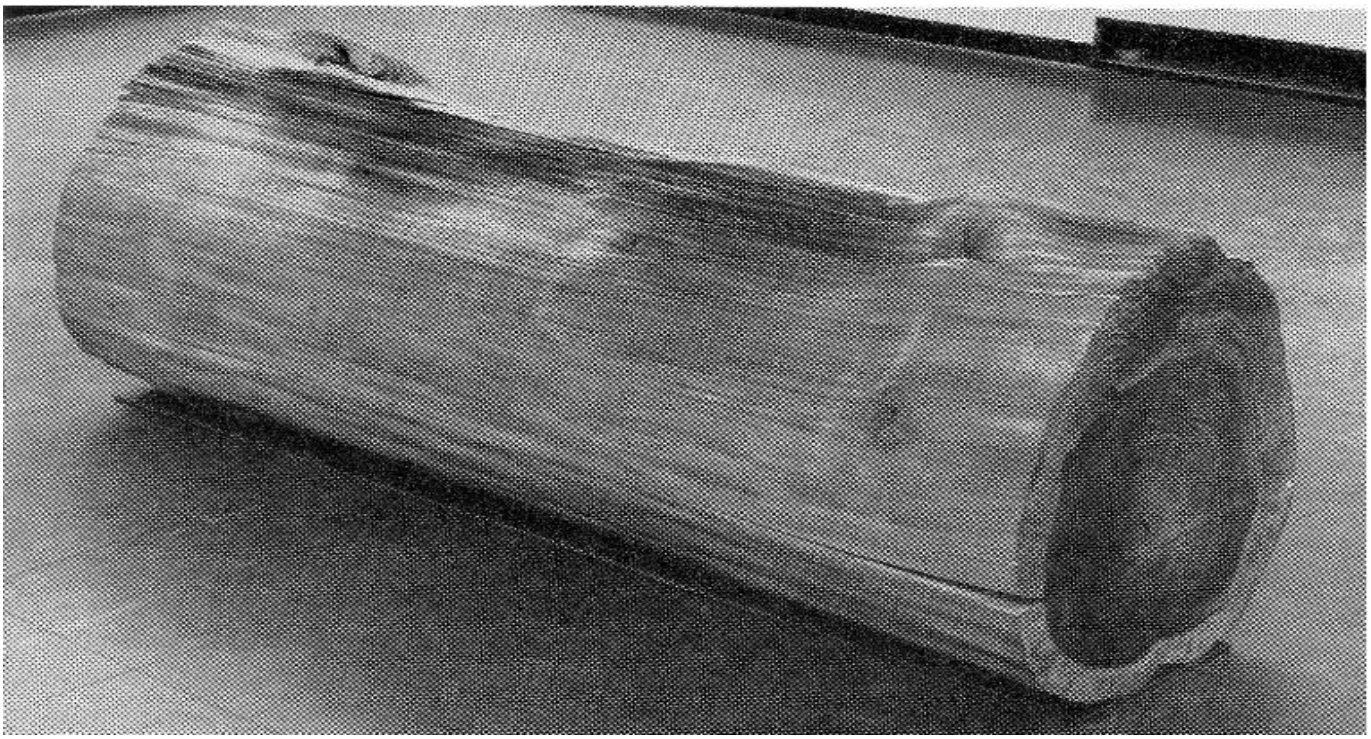
JAF　「第 10 回ジャパン・アート・フェスティバル」

〈巡回展〉

上野の森美術館（東京）、ウエリントン国立美術館（ニュージーランド）, ビクトリア国立美術館（オーストラリア）



Wood No.5 C　1975 年　45x150x40 cm　杉

展 覧 会

1971 「第 10 回日本現代美術展」
1971　個展 椿近代画廊（東京）
1972 「第 7 回 JAF 展」
1973　個展 村松画廊（東京）
1973 「第 8 回 JAF 展」
1973　「今日の作家 '73 年」（横浜）1974　個展 村松画廊（東京）
1974「ウヴェボダ 100 日間石のシンポジウム」（スウェーデン）
1974 ギャラリー16（京都）No.5
1975 村松画廊（東京）No.6
1975 「第 11 回日本現代美術展」
1975 「方法から方法へ展」
神奈川県民ホールギャラリー

カタログ抜粋

「この巡回展の出品作は、コンクールによって選考された 57 人の若い世代と、批評家推薦による 14 人の最前線作家から構成されている が、そこにはわたしがいま述べたような姿勢が、さまざまの方向であらわれている。

たとえば、伝統芸術の一ジャンルである書をみるがいい。森田子龍と山崎大抱は、象形文字の慣用的意味をたちきり、観念とイメージが胎生する始原にたちかえって、激烈な内発的行為の軌跡から、未知の形態と意味をはらんだ新しい記号をつくりだそうとする。

筆の動勢によって墨のマティエールと余白をふくんだ空間全体が緊張しながら生命の躍動にみち、あくまでひらかれた秩序を形づくるのである。 一方、角永和夫や林距は、日本の生活伝統のなかで大きな比重を占める木と紙という素材を使って、彫刻の概念を否定するようなオブジェをつくっている。

角永の『Wood No.5 C』は、太い丸太棒を紙のようにうすく水平に切断し、それをもとどおりにつみかさねている。 木を刻んで自然の何かをかたどり、あるいは木を組みあわせて抽象的な形態を構成するかわりに、この作家は行為と人工を加えた素材によって、自然の物体を再構成しながら、その存在を新しい眼でみつめ直させようとする。 ジャスパー・ジョーンズが二次元の平面に、数字、旗、射的など二次元の記号を描いたように、これはイリュージョンとリアリティを一挙にスパークさせるこころみでもある。林 麺の『形而下の方向に切断された一文字』は、紙というやわらかい素材を集積して、明確に 構築的な空間を現出している。

ジャパン・アート・フェスティバル
選考委員
美術評論家　針 生 一 郎